

## 人材養成計画構想・概要

対象業務及び対象分野 「(2)再教育 ライフサイエンス分野と環境分野の融合領域」  
再教育システム名 「化学・生物総合管理の再教育講座」  
代表者名 「室伏 きみ子」  
提案機関名 「お茶の水女子大学(ライフワールド・ウォッチセンター)」

### 計画の目標・概要

#### 1. 目標

化学物質総合管理や生物総合管理について基礎的な素養を身に付けると共に、国際水準のリスク評価とリスク管理を行いうる人材を養成することを目的とする。

##### <養成目標>

人材養成開始後3年目：当該システムで100人の履修を終える。

人材養成開始後5年目：当該システムで200人の履修を終える。

#### 2. 内容

化学物質や生物の総合管理に必要な知識について、全体的枠組みをカバーしたカリキュラムとするため、分野(化学、生物等)、レベル(基礎、中級、上級)及び講義の性格(概論、詳論、各論(ケーススタディ等))の観点から体系的な科目構成とする。産業界、研究・専門機関、シンクタンク、NPO及び学会・他大学と連携し、実社会で必要となる様々な実務経験を豊富に有する専門家により、教材開発と講義を実施する。人材養成は講義やケーススタディーによって行う。開催日は土日や年2回の短期集中講座(1科目15モジュールを3日間で実施)等を活用して、社会人・企業人が受講しやすい日程となる

### 人材養成の必要性

先端技術を社会に展開して生活を向上させるためには、技術革新が必要であり、かつ、技術革新がもたらすリスクの制御により、安全・安心という価値の実現が必要である。そのためには、産業・経済と生活・社会を支える化学物質及び生物に関する総合管理が必要となる。化学物質や生物の総合管理は、リスク評価に基づいて行われるのが世界の潮流であり、さらに、リスク管理の範囲は自動車や電機製品など最終製品にも及ぶようになりつつある。このため、企業、行政、NGO等にとっては、科学的方法論による化学物質や生物のリスク評価と、それに基づく合理的なリスク管理を行いうる能力が必須である。また、社会全般においても関連する教養を高めていく必要がある。しかし、化学物質や生物のリスク管理に関する教育・研修の機会は、生涯教育の中において少ない。こうした指摘は、平成14年6月20日 産業構造審議会化学・バイオ部会化学物質管理企画小委員会の中間報告などでも出されており、再教育の機会提供の必要性は高い。

### 計画進展・成果がもたらす利点

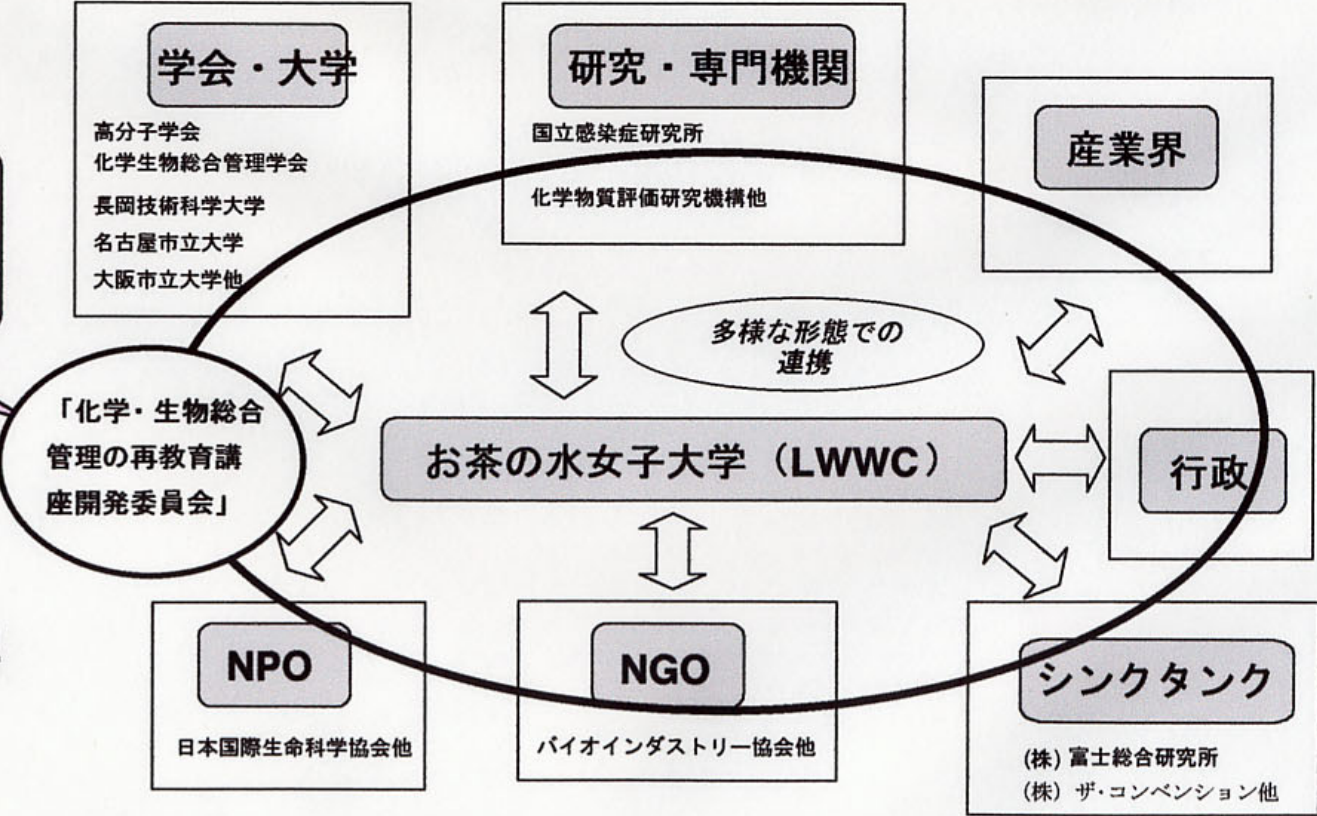
化学物質総合管理に関する内外の動きは、1992年に国連環境開発会議(UNCED)でアジェンダ21第19章が採択されて以来急であり、2002年の持続可能な開発に関する世界首脳会議(WSSD)や2003年に開催された化学物質の管理に関する政府間フォーラム(IFCS)によって加速化している。このほかにも、欧州を筆頭にRoHSやREACHと呼ばれる新しい規範が論議され実施に移されつつある。また、生物総合管理についても生物多様性条約に基づくカルタヘナ(バイオセーフティ)議定書の批准とその実施法の制定など動きは急である。こうした動向に対応するためには、リスク評価やリスク管理の知見を有する人材が不可欠である。この人材養成計画はこうした社会的要請に応えるものである。

# ライフワールド ウォッチセンター

- ・ 生活世界の安全と安心を目指す連携の核
- ・ 研究開発・調査・情報共有発信・教育

カリキュラム、  
教材等の検討体制

専門家を  
各界から招聘



## 目標水準

- ・基礎(学部修了程度) :  
リスク評価やリスク管理について基礎的知識を習得
- ・中級(修士修了程度) :  
「リスク評価ドキュメント」や「リスク管理ドキュメント」を理解できる基本を習得
- ・上級(博士修了程度) :  
「リスク評価ドキュメント」や「リスク管理ドキュメント」を作成する基本を習得

実施内容

## 科目体系

### [教養] 社会技術革新学群

革新技術は、どう社会に展開され、社会や生活を変革してきたか？  
企業や産業は技術革新を通じて社会とどう関わってきたか？

企業は、技術革新を  
いかに進めていくべきか？  
(=技術経営)

企業や産業は、技術革新の  
もたらすリスクをどう制御し、  
社会に説明していくべきか？

### [教養] 技術リスク学群

### [教養] コミュニケーション学群

産業・経済と生活・社会を支える基本的技術

化学物質  
総合評価管理学群

生物  
総合評価管理学群

科学的方法論に基づく「リスク評価」  
社会、行政、産学、企業、市民による「リスク管理」